
仮面をつけている男の娘

風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面をつけている男の娘

【Nコード】

N4558X

【作者名】

風雅

【あらすじ】

どこにでもいそうな普通な男の祁答院罪徒。だがその男は何故か毎日顔に仮面をつけている。しかもその理由がキャラ作りのためという。そんな男が箱庭学園でいろんなことに巻き込まれる話。

第1話 / え？仮面をつけている理由？只のキャラ作りだけど

ヤッホー、祁答院罪徒だよ！僕は今病院にいるんだ。

別に病気でもないんだよ、どうやら異常性を調べる病院らしいんだよ。なぜ僕が

ここにいるかというと僕の成長速度が速いからなんだ。

二歳なのに早く歩きだし、早く言葉を喋りだしからなんだ。それで異常すぎる

成長速度に親が疑問を持って僕をここに連れてきたらしいんだ。今僕の隣には男の子と女の子が座っている。

「『人間は無意味に生まれて』」

「『無関係に生きて』」

「『無価値に死ぬに決まっているのにさ』」

隣にいる男の子が喋り始めた。てか、男の子が持つてるウサギの形ポロポロになりすぎでしょ！？そうか！きつとこの男の子は物を大事にしているからこんなにポロポロなのか。

「『きみはどう思う？』」

「『え〜と』」

「『めだかちゃんとざいとくん』」

おや、名前を呼ばれたぞ、よしその質問に答えてあげよう。

「僕は意味を持っていない人はいないと思うよ。だって人は何らかの意味を持って生まれるんだよ」

僕が自分の考えを言うと男の子はにっこりと笑う。

「『はは、君はおかしいね』」

「『それとなんでざいとくんは何で仮面をつけているんだい？』」

そう、僕は病院に来てからずっと顔に仮面をつけているのだ！

「仮面をつけている理由はね、ただのキャラ作りだよ！あと、君の名前を

教えてくれよ」

「『本当に君はおかしいね』」

「『僕は球磨川禊っていうんだよろしくねざいとくん』」

どうやら男の子は球磨川禊というらしい。僕があだ名を考えていると球磨川君が呼ばれた。

「『残念』」

「『もう少し君たちと話たかったんだけどね』」

「くまちゃん！」

「『くまちゃん？』」

「そっだよ球磨川君のあだ名だよ。僕たち友達だよね？」

「『僕に向かってそんなこと言ったのは』」

「『君が初めてだよ』」

「『あとあだ名を考えてくれてありがとう』」

僕はくまちゃんにありがとうと言われて嬉しかった。

「『けど、ざいとくん』」

「『君は間違っている』」

「『だって世界には目標なんてなくて』」

「『人生には目的なんてないんだから』」

そういうとくまちゃんは大人の人に導かれて消えていった

そのとき、ウサギの人形が引きずられていた。あれ！？あの人形大事にしてるんじゃないの！？

横にいる女の子は呆然としていた。

「次の子、来てください」

どうやらくまちゃんの検査は終わって僕の番らしい。中に入ると。

「こんにちは。きみが、祁答院罪徒くん？」

あれ？僕の目の前に何故か幼女がいる。まあいつか。

「はい」

「よろしく。私の名前は人吉瞳よ。罪徒くんはどうしてここに

来たかわかる？」

「全然わかりませうん」

「君はどこかが異常なのよ。それで、社会に出ても大丈夫のようにするために

ここに来たの。

だから異常か調べさせてもらうわね？」

「は〜い」

それからいろんな機械に入れられて検査した結果。どうやら僕は異常だったらしく病院に通院することになった。あと、新しい友達が増えたんだよ！

名前は人吉善吉どうやら瞳先生の息子らしいんだ。

あれから何日かたったがどうやら僕の親は僕が異常と知ると僕を売ったらしい。

まったくひどい親だね！今日は僕の新しい親が来るらしいんだ。

「君が罪徒くんですか？」

「…………おじいちゃん誰？」

「ああ、すいません。私は不知火袴と申します。罪徒くんは今日から私の息子に」

「なりました。ですが、名前はそのままにします」

「わかりました。袴おじいちゃん」

「それでは、私の遊びに付き合ってください」

袴のおじいちゃんがそう言うと、僕にサイコロを渡した。

「このサイコロをどうするの？」

「ああ、やり方がわかりませんよね。このサイコロ振るだけですよ」

僕がサイコロを振ると落ちたサイコロが同じ面で積み上がった。

「これは素晴らしいですよ！罪徒くん！」

袴おじいちゃんは何故か喜んでいる。

「袴おじいちゃん用はこれだけ？」

「はい。用はこれだけですそれではまた」

よし！袴おじいちゃんの用は終わったらしいから善ちゃんの所に行こう。

「ヤッホー善ちゃん！」

「あ！罪徒くん！また来てくれたんだ！」

善ちゃんの隣で女の子がパズルを解いている。確かあの子は黒神めだかちゃんだったけ？

「全部解いてやったぞ」

どうやらめだかちゃんはパズルを全部解いたらしい。凄いね！

「うわあああ！本当に全部解いちゃった！すごいすごいすごい！きみは
すっごくすごいや！！」

「……すっくくなかない。それにすごくたって何にもならない。私が生きて
いることに私が生まれたことに何の意味もないのだから」

「僕はこの世に意味がないものなんてないと思うけどな？」
僕はめだかちゃんに話し掛けた。

「……貴様は確か祁答院罪徒だったな」

「そっだよ！めーちゃん！」

「……めーちゃん？」

「めだかちゃんのおだ名だよ！」

「……そんなことより私に教えるがよい。私は一体何のために生まれてきた？」

必死に考えたあだ名をそんなこと扱いするなんて……シヨックだ……

「そうだなー。めーちゃんは善ちゃんを嬉しい気持ちにしてくれたんだ。きつと

めーちゃんはみんなを幸せにするために生まれてきたんだよ！」

僕がそう言うともえーちゃんが泣き始めた。

「あゝ。罪徒くんがめだかちゃんを泣かせた」

「えっ。僕が悪いの？めーちゃん泣かないでよう　い棒あげるから」

また、新しく黒神めだかちゃんが友達になった。

第1話 / え？仮面をつけている理由？只のキャラ作りだけど（後書き）

次回は主人公設定に行きたいと思います。

主人公設定

けどういん ざいと
祁答院罪徒

容姿

身長175cm 体重55? 髪の色は黒 目の色は黒。
顔はイケメンではなく男の娘。

性格

人懐っこい
優しい

設定

キャラ作りのため毎日仮面をつけていて、持っている仮面の数は50個ぐらい。
半袖を妹のように可愛がっている。趣味は仮面を集めること。
友達とかにはあだ名を考えて勝手にあだ名で呼ぶ。

異常性

十面十色

自分がつけている仮面の力が使える。(例 犬の仮面をつけると嗅覚が犬と同じぐらいになる)

イレイザー 大掃除

身体に触れているあらゆる物を消す。通常は触れている部分だけが消える。

強く発動させれば触れている部分を伝わり、触れていない部分も徐々に消えていく。

過負荷

エスケープゴート
避難指定

危害をあたえられる瞬間に別の物体と自分の位置を交換する。

セブンクライム
七つの大罪

罪との人格とスキルが変わるが罪徒が持っているスキルが使えない
ようになるが

十分間しか使えない。

主人公設定（後書き）

次回は不知火半袖と会う話です。

第2話 / 何故か罪徒兄って呼ばれるようになった(前書き)

作「どうも〜作者です」

罪「どうも〜罪徒です」

作「めだかボックス12巻やっと思えたZE!」

罪「おめでと〜」

作「ありがとう〜。まあそんなこんなで」

作・罪「第3話お楽しみください!」

第2話 / 何故か罪徒兄って呼ばれるようになった

小学三年生になった祁答院罪徒だよ。

僕は今日は袴おじいちゃんが理事長をしている箱庭学園に呼び出されたんだ。

今まで連絡が無かったのに急に呼び出して、何の用だろう？

コンコン

「失礼します。袴おじいちゃん僕になんのように？」

学園長室にノックして入る。

「まあ座ってください。罪徒くん」

僕がソファーに座ろうとしたらその向かい側に大量な食べ物を食べ
ている

女の子がいた。

「……誰？」

僕は女の子の向かい側のソファーに座って、袴おじいちゃんに聞いた。

「ああ、この子は不知火半袖、私の可愛い孫ですよ」

へえ、袴おじいちゃんの孫なんだ。

「あひゃひゃ！よろしくね！罪徒兄^{にい}」

何故か僕は袖ちゃんの義理のお兄ちゃんになったみたいだ。

「こちらこそよろしくね！袖ちゃん。ポッキーもらってもいい？」

「いいよ」

「袴おじいちゃん僕を呼んだのはこれだけ？」

「はい。今日は袖ちゃんを紹介したかっただけです」

「ねえねえ。何で罪徒兄は仮面をつけているの？」

初めて会った人によくこの質問されるな。

「仮面をつけている理由かい？それはねキャラ作りだよ」

「あひゃひゃ！罪徒兄はおもしろいね」

何故か仮面をつけている理由を聞くと皆、呆れるか笑うかなんだよね。

「そつだ！袖ちゃんは義理の妹だから僕の素顔を見せてあげるよ！」

「本当に罪徒兄の素顔を見せてくれるの？」

「本当だよ。じゃあ仮面を取るよ」

僕は仮面を取った。

「え？……女の子？」

袖ちゃんが僕の素顔を見ると女の子と思ったらしい。

まあ、僕の素顔は女顔だから勘違いもするか。

「違うよ袖ちゃん。僕は『男の娘』だよ」

「じゃあ、罪徒兄が素顔のときどき罪徒姉って呼んでいい？」

おいおい。袖ちゃん男の子にお姉ちゃんなんて傷つくな。

まあ、楽しそうだからいいか。

「いいよ。でも、余り僕仮面外さないよ。それと袴おじいちゃん。僕を呼んだ理由はこれだけ？」

「それと、箱庭学園に入学した時の要求でも聞いたところかと思いましたが」

「要求って例えばどんなこと？」

「例えばクラスとかですね」

クラスか、どこでもいいけどな。

「できたら袖ちゃんと同じクラスがいいな」

「わかりました。今日はこれだけですから帰っていいですよ」

「それじゃあ、袖ちゃんと袴おじいちゃんバイバイ」

僕はそのまま家に帰った。

第2話 / 何故か罪徒兄って呼ばれるようになった(後書き)

作「今回は中学生まで飛ばしたいと思います」

罪「感想等お待ちしております！」

作・罪「それでは皆さん、また来週」

第3話 / 変人って結構シヨックだよね・・・（前書き）

作「ヤッホー。作者です」

罪「どうも。罪徒です」

作「今日は雨だね。雨の日ってなんだか気分が沈むよ」

罪「だよね」

作「まあ！雨に負けないではりきって行きましょう！」

作・罪「それでは皆様、第3話お楽しみください！」

第3話 / 変人って結構シヨックだよね・・・

やあ。中学校に進学した祁答院罪徒だよ。

だれか知り合いはいないかな？と探していると・・・
あれはもしかして・・・善ちゃん？喋りかけてみようか。

「すみません」。もしかして人吉善吉くんですか？

僕が聞くと善ちゃんぽい人がこっちを向いた。

「なんだよ？あれ・・・もしかしてその仮面お前罪徒か？」

よかった！善ちゃんだ！でも善ちゃんが間違ったデビューしてるよ。
なんだいそのオールバックと学ランってシヨックだよ・・・。

「そうだよ善ちゃん！久しぶりだね！」

「久しぶりだな罪徒！」

待ってよ善ちゃんがいるということは・・・

「ねえ善ちゃん。善ちゃんが此処にいることはめーちゃんも
此処にいるのかい？」

「めーちゃん？ああ、めだかちゃんのことか。もちろんいるぜ」

「やつぱりか。懐かしいな。そろそろ教室に戻らないといけ
ないな。善ちゃんまたね！」

「ああ。またな」

どおやら僕と善ちゃんはクラスが違つらしい。
そのまま放課後まで時間がたって。

放課後

やっと終わった。よし暇だから善ちゃんに会いにでも行こうかな
？と

僕が考えていると・・・

「『あれー？』」

「『何処にいるんだろー？』」

久々に聞いたことがある声がある。確かこんな括弧づけた喋り方を
するのは

くまちゃんしかいないけどな〜と思って、声がした方向に向くと・・・

「『あはっ』」

「『いたいた！』」

「『ヤッホー！』」

「『罪徒くん』」

やっぱりくまちゃんだ。それにしてもくまちゃんも久しぶりだな。

「久しぶりだねくまちゃん。くまちゃんは全然変わらないね」

「『変わらないのはお互い様だよ』」

「『罪徒くんも仮面をつけたまんまなんだね』」

「もちろんだよ。これがないと地味なキャラの僕は目立たないからね。それで

僕になんか用事でもあるのかな？」

「『僕』」

「『生徒会長選に出るんだ』」

「『だから』」

「『手伝いと役員を頼みたいんだ』」

うん。役員か。まあ暇だからいいか！

「わかったよ。手伝いと役員をやるよ」

「『ありがとう』」

「『罪徒くんは優しいな』」

「用事はこれだけでいいのくまちゃん？」

「『うん』」

「『用事はこれだけだから』」

「『もう戻るよ』」

よし！くまちゃんの用事も終わったし善ちゃんともーちゃんに会いに行くか！

と思った瞬間に善ちゃんともーちゃんがいた。

「あ、善ちゃんー！めーちゃんー！」

僕が二人の名前を呼ぶと二人がこっちを見た。

「罪徒ではないか！久しぶりだな！」

「久しぶりだね！めーちゃん！今から帰るんだけど一緒に帰らないかい？」

「それはいいな！じゃあ一緒に帰ろうぜ」

善ちゃんとめーちゃんと一緒に帰る途中で生徒会の役員をやることを話したら

応援されたよ。でも一年生で役員って大丈夫かな？

二ヶ月

新生徒会のメンバーの挨拶のために、みんな体育館に集合した。生徒会役員の顔合わせは今回が初めてなのだ！いったいどんな人がいるんだろ？

「・・・庶務 阿久根高貴・・・」

無愛想に挨拶するのは阿久根高貴先輩らしい。高貴だから・・・こ
うくんでいいか！

「僕は会計の黒神真黒。よろしくね！」

黒神ってことはめーちゃんのお兄ちゃんか。そつだなー真黒だから
まーくんだ！

あだ名を考えていると次は僕の番らしい。

「どうも〜。書記になった。一年の^{けだつごん}^を^き^こつ^と罪徒です！よろしくね〜」

「副会長の安心院^{あしむ}なじむだよ。親しみを込めて安心院^{あんしんいん}さんと呼んで
ね」

にこやかに挨拶する安心院さん。安心院だから・・・あーちゃん
でいいか！

「『はじめまして』」

「『この度生徒会長になった』」

「『球磨川襖です』」

「『よろしくね』」

挨拶が終わったから五人で生徒会室に移動。
暇だから他の役員の人を見るか。

「・・・なんだ？」ギロツ

こわっ！

見てたらこうくんに睨まれた！

「なんでもないよ。こうくん」

「・・・・・・チッ」

ふう〜。怖かった〜。今度はあーちゃんと話してみるか。

「初めまして！あーちゃん！僕は祁答院罪徒って言うんだ仲良くしてね！」

「こちたこそよろしくね罪徒くん。でも僕のことには親しみを込めて安心院さんと呼んでね。」

それと、何で罪徒くんは仮面をつけているんだい？」

「できるだけ呼べるように努力するよあーちゃん。それはねキャラ作りだからさ」

「君はおもしろいね。それと安心院さんって呼んでくれないんだね」
「やっぱり。あーちゃんはいい人だったな。よし！次はまーくんに挨拶するか。」

「こんにちはまーくん！僕は祁答院罪徒って言うんだよろしくね！」

「君が罪徒くんかめだかちゃんから聞いてるよ」

「めーちゃんが僕の話をしているのか。一体どんなことを言ってるのか聞いてみよう。」

「どんな風にめーちゃんは僕の事を言ってますか？」

「そうだねー。一言で言うなら仮面をつけた変人って言ってたよ」

僕はそれを聞いて地面にひざがついた。……ショックだ友達から変人って言われると。

「……………そうですか……………変人……………ですか……………」

「でっ……でも！変人だけど優しい奴って善吉くんとめだかちゃんも言ってたよ！」

「変人は決定なんですね……………」

まあいろいろあったけど役員の人たちはおもしろいな。でも変人って言われて超シヨックだ。

第3話 / 変人って結構シヨクだよね・・・（後書き）

罪「めーちゃん達、僕の事変態だと思ってたんだ・・・」

作「まあ、元気出せよ。ガリガリ君あげるから」

罪「え！いいの！」

作「はやっ！それでは皆さんさようなら」

第4話 / 仕事しない生徒会ってどう思う？ (前書き)

作「やってまいりました！第4話！」

罪「イエーイ！パチパチパチ！」

作「よっしゃあー！それじゃあ始めるぞー！」

罪「おおー！」

作・罪「第4話皆さんお楽しみください！」

第4話 / 仕事しない生徒会ってどう思う？

僕が生徒会に入って何日がたったけど……

「やっぱりめだかちゃんはいつ見てもかわいいな〜」

まーくんは毎日めーちゃんのアルバムを見てるよ。

「『あははは』」

「『やっぱりジャンプは面白いな〜』」

生徒会長のくまちゃんは仕事もしないでジャンプ見てるし。

「……………」ボー

こうくんは何を考えているんだろ？

いつも部屋の端に突っ立って変なの〜。

「……………」じー

あーちゃんは何故か僕の事をずっと見てるから怖いんだよな〜

もしかして……………僕がいつもつけている仮面じゃなくて新しく買った

仮面をつけている事に気づいたとか!?!ふわあ〜、急に……………眠たくなつて……………きた。

あれ？眠ってたみたいだ。しかも放課後まで眠ってたよ。

「おはよう。罪徒くん」

あれ〜。なんであーちゃんがいるの？

「もしかして、あーちゃんは僕が起きるまで待っていてくれたのかい？」

「そうだよ。だって僕と君は友達だろ。それに君に用事があるからね」

やっぱりあーちゃんはいいい人だ。こんな人と友達になれるなんて嬉しいな〜。

それと僕に用事ってなんだろう？

「罪徒くんは面白い能力を持ってるよね？」

面白い能力？なんのことだろ〜。もしかして『あの』能力のことかな？

「そうだよ。僕にその能力をくれないかい？」

そう言っつて、あーちゃんが僕の仮面を取ろうとしてきたが僕は避けた。

「勝手に仮面を取らないでくれよあーちゃん。それに心を読まないでよ。」

あーちゃんには『あの』能力は使えないよ」

『あの』能力は僕にしか使えないからね。他の人が使ったらどうなるか分からないよ。

「罪徒くんには使えないのか。じゃあしょうがないね、諦めるよ」

「用事はこれで終わりかいあーちゃん？」

「うん。僕の用事はこれで終わりだよ、球磨川君に大事な用事があるって呼ばれたからね」

「へえ〜。じゃあ僕は帰るとするよ。じゃあね〜」

「うん。またね」

くまちゃんがあーちゃんに大事な用事があるから呼ぶなんてもしかして告白!？

まあそれはないか。と僕が道で考えていたら……

プ~~~~~!!

とクラクションの音がしたから見てみると青信号の横断歩道にトラックが女の子を

轢かれそうになってる!？

「やば!早くあの女の子を助けないと!」

僕は走って女の子をトラックの進行方向から外した。
トラックはそのまま走って行った。

「あれ?」

「大丈夫かい？えっと・・・」

「助けていただきありがとうございます。自分は鰐塚処理と申します」
何でこの子軍人みたいな口調なの？

「よかった。僕は祁答院罪徒って言うんだ。よろしくね鰐塚ちゃん」

「こちらこそよろしくであります。罪徒殿」

「それじゃあ僕はもう帰るから今度は気をつけるんだよ鰐塚ちゃん」
そのまま僕は家に帰った。てかこつくんがめーちゃんに改心されたらしい。

〈鰐塚処理 side〉

私はいつも通りに青になった横断歩道を渡っていると

プ~~~~~!!

とクラクションを鳴らしてトラックが突っ込んできて。私は「ああ、死んだな」と

考えているだが、私はいつのまにかトラックの進行方向から外れていた。

「あれ？」

「大丈夫かい？えっと・・・」

何故か顔に仮面をつけている男の人が聞いてくる。どうやらこの人が私を助けてくれたらしい。

てか何でこの人仮面をつけているんだろ？

「助けてくれてありがとうございます。自分は鱈塚処理と申します」

「よかった。僕は祁答院罪徒って言うんだ。よろしくね鱈塚ちゃん」

どうやらこの人は祁答院罪徒殿と言っらしい。

「こちらこそよろしくであります。罪徒殿」

「それじゃあ僕はもう帰るから今度は気をつけるんだよ鱈塚ちゃん」

そう言って罪徒殿は帰ってしまった。祁答院罪徒殿か・・・

「また会えるといいな」

第4話 / 仕事しない生徒会ってどう思う? (後書き)

作「鰐ちゃん出たー!」

罪「だからあんなにテンションが高かったのか」

作「しかもこれフラグ立ったんじゃない?」

罪「マジで!?!」

作「それでは皆さんさようなら」

第5話 / 男の子にかわいいって心にグサツと来るよね？

「あれ？「こごと」？」

確か僕は家で寝たはずなのに、中学の教室で自分の席に座っている。

「やあ。罪徒くん」

「え？何であーちゃんが此処にいるの？」

「それはね僕の一京の一のスキル『アリバイブロック腑罪証明』で罪徒くんの夢の中に来たからだよ」

「へえ〜。それで用事はこれだけなのあーちゃん？」

「今日、球磨川くんに顔剥がされちゃった」

「ええ〜。そんなグロい事笑顔で言わないでくれよ」

まさかの告白じゃなくて顔剥がすすてくまちゃんはグロい事をするよまったく。

「それとね。僕の秘密を罪徒くんに教えてあげようと思ってね」

あーちゃんの秘密ってなんだろう？

「僕はね罪徒くん。7932兆1354億4152万3222個のアノーマル異常と、4925兆9165億2611万

643個の過負荷。マイナス計1京2858兆519億6763万3865

個のスキルを持つ平等な人外で、『悪平等ノットイコール』なんだ。罪徒くんも入るか？」

「へえ〜。あーちゃんは人外なんだ初めて知ったよ。それとその『悪平等』だっけ？それには入らないよ」

「そりゃあ今言ったからね。罪徒くんは『悪平等』に入らないのか悲しいよ」

普通に「『悪平等』に入らないかい？」って言われて「いいよ」ってすぐ言うわけないじゃん。

「入るわけないじゃん。なんか怪しいし。あーちゃんの秘密を聞いたから変わりに僕の素顔を見せてあげるよ。そして、『あの』スキルの事も教えてあげるよ」

僕の素顔を見せるのは僕が心から信頼してるか惚れてる人にしか見せないんだよ。

「怪しいってひどいな〜。それと僕は信頼より罪徒くんの惚れてる人の方がいいな〜」

「心を読まないですよ。じゃあ、仮面を取るよ」

僕が仮面を取ってあーちゃんに素顔を見せると……

「罪徒くんの素顔女の子みたいでかわいいね」

「男に『かわいい』なんて言わないでくれよあーちゃん。それにあ

「ーちゃんの方がかわいいよ」

「ストレートによく言うよ……でもそんな所に惚れたぜ！」

そう言って、あーちゃんが僕にキスをしようとしてくるが僕はそれを間一髪で避ける。

「急にキスしようとしないでよ！前を言ったけど」あの『スキルは僕にしか使えないんだよ」

「やってみないと分からないじゃないか。それでそのスキルを教えてくださいませんか？」

「そうだね。『あの』スキルの名前は『七つの大罪』って言うスキルだよ」

「ふうん」。あ、そういえば今日女の子を助けたらしいね」

「何で。あーちゃんがその事知ってるの？もしかして知り合い？」

「まあ、知り合いみたいなものだね。おや？そろそろ時間らしい」

「時間？何の時間なの？」

「罪徒くんが起きる時間だよ。それじゃあお別れのキスでもしようじゃないか」

「スキルもあげないし。僕のファーストキスもあげないよ。じゃあねあーちゃん」

「うーん。もう行っちゃったかー」

誰もいない教室で安心院は、呟く。

「生憎と僕もファーストキスなんだよね。僕は罪徒くんに惚れてるらしい……」

だから、何時か罪徒くんに捧げてあげるよ」

第5話 / 男の子にかわいいって心にグサツと来るよね？（後書き）

作「安心院さんにもフラグを立てました」

罪「マジで」

作「マジマジ。次から頑張れ」

作「ついでに罪徒のスキル『七つの大罪』は鋼の錬金術師から取りました」

罪「他人事だと思って、それでは皆さんさようなら」

第6話 / 自分が欲しい物が買える時って何故か邪魔が入る(前書き)

作「作者です！」

罪「罪徒です！」

作「やってまいりました！第6話！」

罪「やっと高校生だね〜」

作・罪「それでは皆さん！第6話お楽しみください！」

第6話 / 自分が欲しい物が買える時って何故か邪魔が入る

『世界は平凡か？』

それは人それぞれだな。

『未来は退屈か？』

退屈じゃない方がいいな。

『現実 is 適当か？』

適当かもしれない。

『安心しろ。それでも生きる事は劇的だ！』

やっぱりめーちゃんはすごいな。感動しちゃった。

『そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ！学業・恋愛・家庭・労働・私生活に

至るまで24時間365日私は誰からの相談でも受けつける！』

相談を受け付けるか。じゃあ僕は新しい仮面を買おうと思ってるけど、どれを買おうか

迷ってるって相談しようかな？

1ノ吉教室

「ねえ、聞いた？新しい生徒会長の噂」

「私達と同じ入学したての一年のくせに、冗談みたいに態度エルミ
たいな奴なんだって」

「引くほど美人なんだけどやることなすこと滅茶苦茶に型破りでさ、
先生もビビツて
手エ出せないそうだぜ」

「しっかし、あのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れる
もんだよ。」

人前に立つのに慣れてるっつーかさー」

「だよーねー。めーちゃんは凄すぎるよ」

「カツ！ありゃあ、人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上
に立つのに

慣れてんだ！それより何で罪徒は不知火を膝の上にのせてるんだ？」

さつきから僕は袖ちゃんをずっと自分の膝の上にのせているのだ！

「それは……兄弟だから？」

「何で疑問系なんだよ？」

「そんなことより。そーでなきゃ一年生で生徒会長になんかなれっこないか」

「そーだよね〜。しかも支持率98%！ぶっちぎりのナンバーワンだしね〜」

「かくゆう私と罪徒兄もあのお嬢様に清き一票を捧げたわけですが」

「全国模試では常に上位をキープ！偏差値は常識知らずの90を記録し！」

手にした賞状やトロフィーは数しれず！スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状

体！実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち！」

いいなーお金持ち。新しい仮面がいっぱい買えるじゃん！
あ、袖ちゃんがまだなんか言ってる。

「全長263・0メートル。高度6万フィートをマツハ2で飛行！
インテル入ってる！」

「いや。途中から人類じゃなくなってる」

「あ！今思っただけど、善ちゃんどーすんの？めーちゃんが当選したから善ちゃんも
生徒会に入るんでしょ？」

「カツ！なわけねーだろ！これ以上あいつに振り回されてたまるか

つての。

俺は絶対！生徒会には入らない！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガシッ！

「まあ、そうつれないことを言うものではないぞ。善吉よ」

「!?!」

めーちゃんが善ちゃんの頭を後ろからガシッと掴んだ。もう逃げられないぞ。善ちゃん。

「おお、罪徒ではないか。どうだ？貴様も生徒会に入るか？」

「残念だけどもーちゃん。僕はこれから新しい仮面を買いに行くんだよ」

ガシッ！

「貴様もそうつれないこと言うものではないぞ。では、行くぞ」

やばいぞ。僕もめーちゃんに捕まっちゃった。どうしよう・・・
そうだ！

「袖ちゃん！助けて！」

「ご愁傷様。罪徒兄」

ひどい！お兄ちゃんは悲しいぞ袖ちゃん！もう僕に残された選択は・

「善ちゃん……」

「罪徒……」

「「ぎゃあああああああ！！！！」」

善ちゃんと一緒に悲鳴を上げる選択しかなかったよ……

生徒会室

「………ったく。普通に連れてくるってことができねーのかよ。
生徒会長さん」

「善ちゃんのゆう通りだよめーちゃん」

「ふん。私の誘いをすげなくし続ける貴様らが悪い。それによそよそしい呼び方をする
ものではないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい！」

「ねえー。めーちゃん。僕帰ってもいい？」

「却下だ」

最悪だよ！早くあの仮面を買おうと思っただのに無くなってたらめーちゃんのせいだ！

「つてめーちゃんなんで脱いでるの！？」

「あつ、当たり前前みてえに人の後ろで着替えてんじゃねえよ！お前はもっと恥じらいという概念を持って！」

「私と貴様らの間に恥じらいなど何の意味がある。特に善吉。少なくとも小六まで私と一緒に風呂に入っていた男の言うことではないな」

「昔の話だ！！」

「それに善吉。私は仕事を手伝ってもらったために貴様を引き込もうとしている訳ではないぞ。

私に貴様が必要だからそばにいてほしいだけなのだ」

「・・・あ。ああ！？」

そばにいてほしいって告白じゃね？

「へえー。めーちゃんは善吉ちゃんが必要だけど僕の事は必要じゃないんだ」

「拗ねるな。もちろん罪徒も必要だぞ」

「ありがとー」

「で、さしあたっては目安箱なのだが、先ほど開いてみたところ早速第一号の投書があった」

目安箱かー。どうしよう？僕の悩みも投書しようかな？

「で、どんな内容なんだよ」

「ふむ。読んでやろう」『三年の不良達が剣道場を溜まり場にしていて困っています』

す。どうか彼らを追い出してください』

だそうだ」

「ねえ、善ちゃん。これって……」

「罪徒。お前が言いたいことがわかるぞ」

「「巻き込まれる流れだよね？」（だ）」「」

第6話 / 自分が欲しい物が買える時って何故か邪魔が入る（後書き）

作「次回いつたい罪徒はどうなってしまっただろうか！」

罪「いつたい僕はどうすればいいんだろ？作者のテンションについていけないよ」

作「それでは皆さん次は第7話でお会いしましょう！」

罪「さよなら〜」

第7話ノ 地の分にツッコミするってある意味超能力だよね？（前書き）

作「どうも！皆さん」

罪「ヤッホー」

作「投稿遅くなってますいません。最近は忙しくて、投稿するのが遅くなりました」

罪「そうだねー。最近は棒術の練習で帰るのが6時とか6時半だからねー」

作「それでは皆さん第7話お楽しみください！」

第7話 / 地の分にツッコミするってある意味超能力だよな？

「ああ！ 祁答院罪徒だよ。」

「めーちゃんに巻き込まれて剣道場に行くことになったちゃった」

「はやめる罪徒。気持ち悪いから」

「善ちゃん。地の文にツッコミしないでよ」

「貴様ら着いたぞ」

「どつやら剣道場に着いたみたいだね。」

「だから はやめるよ罪徒」

「わかったよ。やめればいいんでしょ」

「貴様ら静かにしろ。開けるぞ」

ガララララ

「あ？ 誰だアお前ら」

「一年十三組生徒会執行部会長職黒神めだかだ。目安箱への投書に
基づき

生徒会を執行する」

「あー聞いてんぜ。今をときめくイカれた新会長って奴だろ？ こん

なところにお出でに
なるとは驚きだな！支持率98%だか何だか知らねーが生憎俺らは
残りの2%の方だぜ！！」

「貴様がリーダーの門司三年生だな。剣道か懐かしいぞ私も昔少し
だけかじったよ。」

この木刀もよく手入れされておる黒檀とは随分と張り込んだもの
だ」

「！？（え・・・あれ！？いつの間に取りられた！？感覚どころか気
配も

しなかったぞ！？）」

あれって『無刀取り』だっけ？僕もやってみたいな。

「かつ囲めおめーらッ！！」

「おっおっっ！」

「なんで罪徒が不良側の方にいるんだよ！？」

「それは雰囲気的に面白そうだからに決まってんじゃん」

しょうがないから元の位置に戻るか。

「・・・制服改造に染髪、装飾・・・校則違反のオンパレードだな。
まあ、私もあまり人のことは言えんが

なっ！？めーちゃんが分身した・・・だと！？

「なッ！？何イイツ！？」

「それでも煙草だけは控えておけ、貴様達の健全な成長を阻害するし

何より将来の楽しみがなくなるぞ！」

「え・・・オレのタバコ！？」

「な・・・何だ今の！？」

「忍法か！？」

「しかしまあ荒れ放題だな。よくもここまで学園施設を荒廃させたものだ

逆に感心したくなる」

普通感心したらダメでしょ。

「なっなんだよセツキョーかよ！」

「お呼びじゃねーんだよ会長さんよお！いい気になってんじゃねーぞコラア！！」

「哀れなことだ」

「！？？」

「貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている。何か重大な理由が

あって挫折を経験し道を踏み外してしまったとしか考えられん」

おお、出た。めーちゃんの真骨頂『上から目線性善説』！
すごい勘違いだね。

「親に見捨てられたか？」

よき師に出会えなかったか？

友に裏切られたか？」

何故、イナバウワウのポーズを取るんだろう？

「安心しろ私が貴様達を更生させてやる。剣のこと以外何も考えられない

ようにしてやる」

生徒会長がそんなことしたらダメでしょ！

「矯正してやる、強制してやる

改善してやる、改造してやる」

改造ってあなたは一体どこの悪の組織ですか！？

「二度とだれけようなどと思えぬよう泣いたり笑ったりできなくしてやる」

精神科に連れていかれるよ絶対！？

「まずは素振り1000回からだ！貴様達、今日は帰れると思うなよー！」

やっと仮面を買いに行けるよ。よかったよかった、よし帰るか。

「罪徒。貴様も素振りをするのに何故帰ろうとしている？」

「今から急いで新しい仮面を買いに行こうと思ってるんだよ」

「問答無用！！」

「ギヤアアアアア……」

翌日

善ちゃんと袖ちゃんと一緒にごはん食っているよ。

「前から思ってたんだけどさー。人吉ってひょっとして頭悪くない？なんで

毎回毎回お嬢様のシゴキに付き合ってるんだよ」

「うるせえ。昔っからどっかずれてんだよあいつは、自分の優秀さにまるで自覚がなくてそのくせに自分と同じレベルを強要しやがる。

だからあいつには一生かかってもわかんねーんだよ。ま、今回はそれが

たまたまうまく転んだわけだ。あんなヒデエ目に遭っちゃあいつらもう剣道場には

近寄らねエだろ」

「「……………どーだろうね？」」

「ああ？」

「人吉つて付き合い長い割に案外わかってないよね」

「『ワルい奴やつつけてめでたしめでたし』めーちゃんがそんな力
ンタンな

女の子だったら善ちゃんも僕もそんなに苦労しないでしょ？」

「冗談じゃない。めでたくなってもらわなきゃ困るんだよ」

んっ？今誰か何か言わなかった？

「んん？今後の席に誰かいなかったか？」

どうやら善ちゃんも聞こえたみたいだ。

「え？うん。同じクラスの日向がうどん食べてたよ　それがどう
したの？」

「……………いや。別に……………」

善ちゃんも日向君の言ったことが気になるのかな？

「まいーんじゃない？もうすぐあんたも罪徒兄もお役目御免なんだ
し」

「あ？」

「知らないの？今日の放課後学園側主催の役員募集会があるんだよ
二年三年の

特待生集めてね。生徒会メンバーさえ決まっちゃえばもう人吉も振り回されること

はなくなるしよかったじゃんさ！」

僕と善ちゃんはごはんを食べて一緒に剣道場に向かっているとだよ。

「まったく不知火の奴『お嬢様のこと案外わかってないよね』
とあ！？」

善ちゃんさつきからこの調子だよ。

「俺は二歳の頃からずっとあいつのそばにいるんだ！あいつのことは俺が一番わかってるんだよ！カツ何だか知らねーけど無性にイライラするぜ！」

「善ちゃん剣道場に着いたから中に入るよ」

ガラ

「「なッ！何イイ！？」」

なんとということでしょう！昨日まで廃墟当然だった
剣道場がきれいになっているではないですか！

「遅いぞ善吉。罪徒。稽古開始の時刻はとうに過ぎておる遅れた分
帰りが倍は遅くなると心得よ！」

めーちゃんが掃除婦姿で剣道場を掃除していたのか。

「しかし連中も遅いな最近は時間にルーズな者ばかりだ」

「おっ遅いも何も来るわけねーだろうが！道場掃除すりゃ連中が心開く

とでも思ったのか！？大体お前なんでここまでしてんだよ。あんな連中お前に

とっちや見知らぬ他人だろ？」

「愚問だな私は見知らぬ他人の役に立つため生まれしてきた。順位も記録も

段位もくだらん誰かの助けになれた時だけ私の心は安らぐのだ！」

めーちゃんがそういうことをするようになったのは僕と善ちゃんがきっかけだったけ？

「…………カッ！羨ましいねどうにも！お前くらい才能に恵まれてたら

俺もそんな風に生きたかもな！」

「才能か…………それも下らん言葉だ「くだらなくねエよ！みんなそれ

がねーからガツついて生きてんだよ！！」

まあ、普通はそうだよな。

「大体お前そんな生き方続けてたらいつか絶対痛い目見るぞ！わか
って

んのか？あいつらはお前の支持者じゃない残りの2%の方だつて

「

「2%ではない8人だ生きてる人間を比率やら割合やらでひとくくりにするな！門司三年生。宇佐三年生。鳥栖三年生。伊万里三年生。指宿三年生。中津三年生。嬉野三年生。湯布院三年生。他の生徒と何ら分け

隔てないこの箱庭学園の誇るべき生徒だ。私は誰の味方でもするし誰のことも

見下さない！」

「じゃーもう好きにやってろよ！どーせ俺は生徒会の人間じゃねーんだし

「

ガラ

善ちゃんが剣道場から出ようとしたら……

「あ……あんならなんで……」

遅れたけど門司先輩達来たよ。

「別に……俺ら他に行くトコなんかねーしヒマだからな。それに俺ら

ろくでなしなんだけどよハンパな奴とそーじゃない奴の区別くらいはつくんだよ。

「つーかこんなボロボロにされて引き下がれるか！言っとくけど俺ら絶対

更生なんかしねーからな！できるもんならやってみろコラアツ！」

「そつだやってみろコリアツ!!」

「お前は関係ないだろこの仮面ヤロー!」

てか善ちゃんいつのまにかいないんですけどー!

「いいだろう私は誰の相談でも受けるし誰の挑戦でも受けるぞ。

では今日は素振り一万回からだ!あと罪徒は十万回だ!」

最悪だ!こつなつたら・・・

「めーちゃん!門司先輩達も素振り十万回の方がいいって言うてるよ!」

「そつか!なら素振り十万回だ!」

「フタケタ増えた!?!」

〈善吉side〉

なんだよ・・・これじゃまるで俺が間違ってるみたいじゃねーか!

(私に貴様が必要だから、そばにいてほしいだけなのだ)

馬鹿げてる・・・あいつに俺が必要だったことなんてあるもんか

あいつは気付けば人の上に立ってる奴だった。その圧倒的なパラメーター

ゆえ絶対王政さながらの振る舞いゆえに妬まれながらもやつかまれながらも

清濁併せ飲むその生き様に結局は誰もがあいつを好きにならずにはいられなかった。たとえ、どんな痛い目を見たとしてもきつとあいつは

意にも介さずそれから同じように生きていくのだろう。

本当はわかってんだよ。間違ってるのは確かに俺なんだって……

グシャアッ

「ったく……ホント！アテにならねえ生徒会だよなあ。僕は
追い

出せつつって頼んだんだぜ？雑草育ててどうすんだよアホが！」

第7話ノ 地の分にツッコミするってある意味超能力だよ？（後書き）

作「最近は何起きもしないといけないからきついよ」

罪「朝は6時起きだっけ？」

作「そうそう。6時に起きないといけないからきついんだよね」

罪「まあがんばるしかないよ」

作「そうだね。それでは皆さんまた来週〜！」

第8話ノ シンデレもいけどクーデレもいけよな。(前書き)

作「どうも～作者です!」

罪「罪徒です」

作「最近タイトルが思いつかなくなってきた」

罪「まあ、がんばって。それでは皆さん、第8話お楽しみください
!」

第8話ノ ツンデレもいいけどクーデレもいいよね？

やあ、皆のお兄さん罪徒お兄ちゃんだよ

さっきまで剣道場で素振りしてたんだけど、めんどかったから逃げてきたぜ！まず素振り十万回つてやばすぎるでしょ。

この曲がり角を通ったら教室だ……

「なんで善ちゃんが倒れているの？おーい善ちゃん起きろー！……
返事がないまるで屍のようだ」

「勝……手に……殺すな……」

「どうしたんだい善ちゃん。何で頭にケチャップかけてるの？」

「ケチャップじゃねえ。後ろから誰かに殴られたんだ」

「善ちゃん早く保健室に行ってきたよ」

「ああ、そうするよ」

よし！善ちゃんを殴った相手はだいたいわかったから仕返しに行くか。

「ったくよく、高校じゃいい子ちゃんて通したかったんだけどナ」

「だ……誰だお前……？」

「僕？僕は真面目な一年生ですよ。真面目に剣道がしたい真面目で真面目な男です」

日向はそう言いながら不敵に笑みを浮かべ、木刀に付いている血を拭う。

「だけど聞いてくださいよ僕、団体行動とか上下関係とか苦手ですてね、先輩とか顧問とかと揉めていつつもボコつちゃうんですよ。それで試合出れねーの」

「くっ……だから剣道部が休部中のこのガッコに来たってわけか……」

「ピンポーン　ここでなら一人で好きにできますからね。でも計算外！立派な剣道場には招かれざる先客が！だから、例のバケモノ女こと生徒会長に草むしりをお願いしたんですよ。ですけど、いやいやうまく運ばねーもんですねえ！あ、助けを期待してんならムダですよ。」

あの女今頃役員募集演説の真っ最中ですから　しっかしこんなに

キレーに掃除して

くれたのは助かったかな？立つ鳥跡を濁さずっスね」

「……ま……待てよ……勝手なこと吠えてんじゃねえよ、たつた今思い

出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよ!!」

門司は竹刀を日向に突き向けて言い放つ。その言葉を聞いた他の不良達も、

立ち上がる。

「あー俺もそうだった」

「そーいや俺も」

「俺も」

「俺なんか日本一の剣士目指してた……気がする」

「……うっぜー！ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうと

してんじゃねーよ！剣道三倍段って知ってつか！？僕はあんたらの三倍強いっ

て意味だ!!」

そう言っつて日向は木刀を振りかぶり不良達に振り落とそうとした・
・その時

ガシッ!

「もうそこらへんにしたらどうだい日向君？」

「ざっ……罪徒！へっ……やっぱお前は妨害すんのな」

「そんなわけないじゃん。僕は先輩達が立ち上がらなかつたらほつとくつもり」

「だっただけどね」

「ああ！？だつたらスツこんでろよ！学園施設を不当に占拠してる雑草ども

をむしってやってんだ僕は正しいだろうがあアン！？」

「……確かに日向君は正しいよ……だけどもーちゃんや善ちやんの方がもつと

正しい。僕は善ちゃんみたいにめーちゃんと長く居たわけじゃないから、何処までが正

しいのか分からない。けど、強さを振りかざして人を君よりは絶対正しい！もしも君が

めーちゃんや善ちやんの正しさを否定しようとするならそいつは僕が許さない！！」

「……ケツお前が許さねーからなんだっつーんだよ！どいつもこいつも面倒くせえ！

お前！剣道三倍段ってつか！？」

僕は拳を握りしめ日向を殴った。

「知るかつ！」

よし！終わった！終わった！後はめーちゃんに任せて僕は新しい仮

面を買いにでも
行くとするか。

「・・・なんで」

「?どうかしました?」

「なんで俺達を助けてくれたんだよ・・・」

「ん・・・先輩方が改心したからかな?人を助ける理由なんてな
んとなくて
いいじゃないですか。僕は善ちゃんの仇を打ちただけですか
ら。じゃあ僕は
帰りますんで」

〈後日談〉

その後、どんなやりとりがあったものか剣道場はみんな仲良く使
うことになった
みたいだ。剣道部(仮)ということで、なんと!日向君が指導を務
めているらしい、
ビックリだ!まあ要するに、日向君もめーちゃんのことを好きにな
ってしまっただ。

会長就任後、ほんの数日でのそんな顛末は、善ちゃんを決心させる
には十分だった。

「ねえめーちゃん。何なのこの花昨日まであつたけ？」

「うむ。これから生徒会業務を行う上での指針としてな、案件ひとつ解決すること、

花を一輪飾ろうと考えた。とりあえず二輪だ」

「は、女の子らしいところもあるじゃねーかよ。失敗した時はどうすんだ？枯らすのか？」

「いやいや。善ちゃん枯らしちゃダメでしょ。」

「失敗などしない、しても数えない。いつか見渡す限り一面に花を咲かせるのが、私の夢だ！」

「でっ、できんのかねそんなこと。お前が募集会ブツチったせいで結局役員は一人も増えなかったそうじゃないか！」

「構わんさ。もとより私は、貴様らを置いて他の誰かと組む気はない」

「でも、なんでめーちゃんは善ちゃんや僕にこだわるの？それ以前に、僕達は門司先輩達と同じ他人じゃないか」

「おかしなことを言うものだな。私は貴様らを他人と思ったことなど生まれて

このかた一度もないぞ。貴様らのことは私が一番よくわかっておる

し、私のことは
貴様らが一番よくわかっておるのだからな！」

僕と善ちゃんのことを一番よくわかってるだって!?!なら僕がどんな仮面が好きなのかもわかるのかな？

「善吉は二歳の頃からずっと私のことを心配してくれている。罪徒は二歳の頃と中学生の頃から私のことを支えてくれている。貴様らだけが今でも変わらず私のことを守ってくれている。そんな貴様らがいるからこそ私は安心して他人のために動けるのだ!！」

「……………どれでもいいや、その腕に巻いてるヤツ一個よこせ」

「……………どういう意味だ？」

「……………っ、振り回されてやるっつってんだ!?!気が気でなくて見てらんねーんだよ、やりゃーいーんだろーがやりゃー!俺がこの箱庭学園をお花畑にしてやつから、さっさよこせ!！」

「僕もこの箱庭学園をお花畑にするのを手伝っけど、役職は生徒会補佐

でいいかな、めーちゃん？」

「……………ふん、ひねくれ者め、それにしても貴様ら随分気を待

たせてくれたじゃな

いか。しかしまあ、一応礼を言っておこう。………ありがとう
おっ……！」

そう言っつてめーちゃんは僕と善ちゃんに抱き着く。

そう、これがめーちゃんの真骨頂その？『ツンデレ』！

でも、僕はツンデレもいいけどクーデレがいいな。

「あ、でもちゃんと庶務ドシケツからなのな」

「手柄を立てて這い上がれ！」

よし、生徒会補佐になったぞ！生徒会に入るのもこれで二回目だよ。

第8話ノ ツンデレもいけどクーデレもいいな？。(後書き)

作「ツンデレもいけど自分はクーデレがいいな」

罪「僕もクーデレかな」

作「それでは皆さんまた来週」

罪「バイバイ」

第9話 / 自分と同じ趣味の人を見つけるとテンションが上がってしまう(前書

作「皆さん投稿を遅れてすみません！」

罪「まったくだよ。次からは気を付けてね？」

作「わかりました！それでは、第9話ご覧ください！」

第9話 / 自分と同じ趣味の人を見つけるとテンションが上がってしまう

やあ皆の友達、罪徒君だよ！

僕と善ちゃんが生徒会の役員になって、一週間が経過したんだ。

「善ちゃん。黒い制服、似合ってるねーww」

「うるせえ！大体俺は黒い制服似合わねーよ。だから制服白のこのガッコ来たってのに……」

「いや、そんなことはない。善吉には黒が良く似合う」

「「どうわっ！」」

びっ、びっくりした……！！

めーちゃんはいつの間に関に背後に？もしかしてめーちゃんは忍者なのか！？

「だからお前はなんでいつもいきなり後ろにいるんだよ……！」

「そつだよめーちゃん！心臓に悪すぎるからやめてよ……！」

「見てくれが気になるなら内側にジャージでも着てみたらどうだ？きつと」

格好よいであるっ」

無視するということとは、背後から出てくるのをやめる気はないな。

「……………たくよー。ジャージの上から制服とか何バカなことを……………」

絶対似合わないと思っうな。

「って、うわなんだコレ！？デッ、デビルかけえ！！反骨精神のカタマリみてーだ」

デビルかけえってなんですか！？初めて聞く言葉なんですけど？

「目安箱をチェックしてきたぞ、明日から目安箱の管理は善吉の仕事だ。」

本生徒会の最優先事項なのだからくれぐれも手を抜くではないぞ？

そして、目安箱に投書した人が来るまで待ちます。

「ふむ……………どうやら今回はきちんと記名しておるようだな」

「あの……………ごめんなさい。本当はこんなこと下級生のあなた達に相談するような

ことじゃないかもしれないんだけど、剣道場のこととか友達から色々聞いて……………」

「遠慮はいらん構えるな私は誰の相談でも受けつける！」

「（なんでこいつ上級生に敬語使わないんだろう……………」

「（なんで善ちゃん制服の下にジャージを着けることが格好いいんだろう……………」

「（なんでこのコ仮面なんかつけているんだろっ・・・）」

「それで相談っていうのはこのことなんだけど・・・」

机の上に置かれるのはボロボロに切り裂かれたスパイクと、脅迫状の用に書かれている

紙。

内容は『陸上部やめろ』・・・酷いな。

「・・・・・・・・酷いな」

「私、今度の大会で短距離離走の代表に選ばれて、二年生で代表に選ばれるなんて

滅多にないことだからすごく嬉しかったんだけど、三日前・・・スパイクがこんな

風にされて・・・・・・・・」

「・・・・・・・・犯人の心当たりは？」

「わかんない」

よし！大体の犯人の特徴はわかった袖ちゃんに電話でもしておこう。

電話を終えると、有明先輩が泣き叫ぶように訴えていた。

「第一、あたしこんなことしたかもしれない人達と一緒に練習なんかできないよ！み

んな怪しくて！誰も信じられなくて！不安で不安で・・・夜も眠れ

ないんだよ!？」

「安心しろ有明二年生、眠れぬ夜は今夜で終わりだ。この黒神めだが今日中に犯人を突きとめてやる!!」

めーちゃんがそう言ったあと有明先輩は出て行った。

「しかし大丈夫なのかよめだかちゃん、今日中とかまた大言壮語しやがって、この程度の材料じゃ犯人の特定なんてまずムリだぜ？」

「『陸上部女子』で『陸上歴はそれなりに長く』『短距離走を専門とし

『有明二年生と同種のシューズを愛用』『左きき』で『文車新聞を購読』し

『23地区に住んでいる』 誰かだ」

え？何その単語の羅列？

「……はあ？何だそりゃ？」

善ちゃんも分かっていないようだ。

「ふ、私を甘く見るなよ罪徒！貴様の声など全て聞いておったわ！」

「どづいつことなんだ？罪徒？」

「それはね善ちゃん。めーちゃんが言った単語は、犯人を特定する単語なんだよ」

「……はあ!？」

「スパイク、切り口、脅迫状に使っている切抜き、……これから全て推理したんでしょ？」

「(……推理力がありすぎて気持ち悪い!!)」

「ちなみに罪徒も分かっていたぞ？」

「……なんでわかるの？」

「ふっ、電話の内容だ！私の言った単語を電話の相手に全て話していたのはわかっている！」

「凄すぎるでしょ!？」

「他人の努力を否定する行為、がんばる人間の足を引っ張る行為、私はそういう行為が大嫌いだ！」

「めーちゃんが持っている紅茶から泡が出てる。」

「もしかして紅茶の温度が上がってるの？何それ超怖い。」

「私は怒っているぞ善吉、罪徒！目安箱への投書に基づき生徒会を執行する!!」

「ということやってまいりましたグランド。」

「陸上部所属三年九組諫早先輩。有明先輩と同じ短距離を専門とするアスリートで

利き腕は左。同じスパイク履いてるのは見てのとーり！お住まいは23地区で三年前から文車新聞を購読中
だつてさ」

「……………」

「さつすが袖ちゃん！今度ご飯をおごつてあげるよ」

「さつすが罪徒兄！」

「いつも思うんだが、不知火お前どつからさつというの調べてくんのか？」

「あひゃひゃ。人吉が正義側のキャラでいたいならそれは知らない方がいいね」

「どういう意味なの袖ちゃん。」

「ちなみにあの諫早先輩。有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちしています」

「……」

「……………そりゃ決まりだな」

「そうだね。三年が二年に抜かれちゃ屈辱だろうし、犯人ほとんど

ど彼女で間違いないんじゃない?」

「しかしな善吉よ」

「!」

「どこから出てきたのめーちゃん?」

めーちゃんが善ちゃんの上からひよいつと現れた。

「実質的な証拠はまだ何もないのだ。ほとんどという言葉の意味は絶対ではない状況証拠だけで他人を悪人と決めつけるのはよくないな」

「・・・上から目線性善説もいーけどさ、物的証拠なんて集めようねーだろ。俺ら警察じゃねーんだからよ!」

その通りだね。物的証拠なんてスパイクの指紋ぐらいしかないからね。

「まさか本人に直接聞くわけにはいかねーし・・・ん?」

『ふうー』

『諫早三年生、貴様が犯人か?』

『!!!』

『いや。このスパイクの件なのだが・・・』

・・・いつの間に？もしかして瞬間移動！？

僕の隣でずっこける善ちゃんと、腹を抱え笑い転げている袖ちゃん。僕は啞然しているよ、顔が引きつって元に戻らないだけ。

『しっ、知らないっ!!』

『・・・?』

「逃げた!」

「いやまあ、そりゃ逃げるだろ。追っぞ!」

「ところで人吉!(キリッ!)」

「あ!？」

「なんで制服の下にジャージ着てんの?ヘンだよ?」

「今聞くことか!？」

「まったくだよ・・・善ちゃん、めーちゃんが諫早先輩に追いついてるよ」

「マジか！？早く行かねーと!?!」

善ちゃんが走り始めた。僕は行かなくても大丈夫そうだから、そのまま帰ろうかな。

「今日の晩御飯何しようかな？それと袖ちゃんには何をあげるのかな？」

おっとそんなことを考えてるとあと少しで校門に着きそうだ。

「むっ………待てその貴様」

「え？」

なんか変な人に呼び止められてしまったどうしよう。

「どうしたんだい王土？」

王土先輩(？)の後ろから仮面をつけた人が……仮面!?

「すみません！名前を教えてください！」

「え！？僕は行橋未造」

「未造先輩ですね！僕は祁答院罪徒つていいます！」

やばい！同士がいる！！僕と同じで仮面をつけた同士だ!!

「う、うん。よろしくね」

「この偉大なる王の俺を無視するとは……いい度胸ではないか。『跪け』！」

「あ痛!？」

あれあれ?なんで僕は跪いているのかな?もしかしてこの人は十三組なのかな?

こうなったら、久しぶりに『七つの大罪』セブンクラ임を使うか。

「はあ、何ですかあなたは急に、我が何をしたというんですか?」

「雰囲気が変わったか?まあいい、俺の言葉の重みをくらったのに立ち上がるか」

「……黙ってください。……少し私の時間とスケジュールを確認して喧嘩を売ってください」

我は普通に立ち上がり、制服についたゴミを払う。あ、そうでした!初めまして皆さん

『傲慢の罪徒』です。なんで口調が変わっているんだと思っ
ていますね?それは

『七つの大罪』セブンクラ임の能力で性格が変わっているんです。

「その口の利き方……王であるこの俺にたて突く気が?……『平伏せ』!」

「何故あなたみたいな奴に我が平伏さないといけないのですか?」

「・・・何？」

こんな人が王だったら我は何ですか？神ですか？まあそれは置いて、今度はこっちのターンですね。それじゃあ、さっきの仕返しでもさせてもらいましょう。

「なっ！影が動いているだ！？」

王土先輩の身体を下から影が徐々に浸食している。これが私のスキル。『影の舞踏会』シャドウフェスティバル相手の影や

自分の影を操るスキルです。おや？どうやら十分経ったようです。おしかったですね、このまま影で包もうと思ったんですがしょうがないですね。

「影がどんどん引いていつているだ！？」

十分経っていつもの僕に戻ったから影が引いていつているね。

「それじゃあ、王土先輩と行橋先輩。僕は帰りますね！」

「ま、待て！貴様は何者だ？」

さっき行橋先輩に自己紹介していたのにこの人は聞いていなかったのかな？

「僕は、一年一組の祁答院罪徒です。それじゃあ、さようなら！」

やっと家に帰れるよ。

第9話 / 自分と同じ趣味の人を見つけるとテンションが上がってしまう(後書)

作「やっと出たな。罪徒の過負荷が出たね」

罪「そうだね。それに同士の行橋先輩も見つけたから嬉しいよ」

作「それはよかったね」

罪「それにしても、傲慢の僕いつもの僕と変わり過ぎじゃね?」

作「まあいいじゃん」

罪「よくないよ。はあ、あと6つの性格がどんなものか気になるよ」

作「それでは皆さんまたお会いしましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558x/>

仮面をつけている男の娘

2011年12月11日06時45分発行